

42141

教科書文庫

4
815
42-1917
20000 38645

Kodak Gray Scale

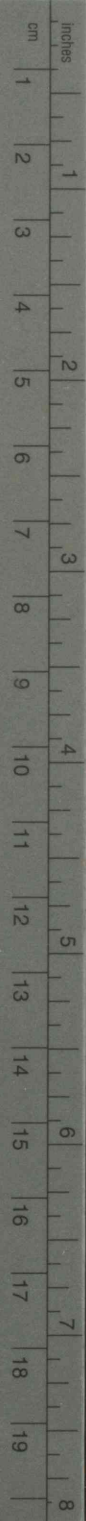
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

3759
Ka19
資料室

新
体
女
子
文
法
上
卷



濟定檢省部文

用科語國校學女等高 日七廿月二十年六正大

奈良女子高等
師範學校教授
文學士春日政治編

新體女子文法 上卷



東京 修文館藏版



はしがき

本書は高等女學校及び之と同程度の女子中等學校の國文法教科書に充てんが爲明治四十四年七月文部省訓令高等女學校及び實科高等女學校の教授要目に準據して編纂せるものなり。中等教育に於ける文法は、講讀の材料より歸納し來り、更に之を講讀の材料に演繹しゆくべきものにして、作文に應用するは勿論、今日の文法教授が多く講讀と没交渉なる傾向あるは、編者の常に嫌らずとする所なり。本書もとより極めたる大綱を示し、たゞ教授の總括として使用せらるべきものに過ぎざれども、教授者の本書に講讀の材料を自由に適用すると否とが、實際教授の死活にして、又講讀の材料を、那邊まで本書に適用し得るかが、

はしがき

やがて本書の價値を判ずる所以なり。
 文法教授は、動もすれば艱澁なる條文を陳ねて、無意義に之を諳
 記せしむる弊に陥り易し。本書はこの弊を濟はんが爲に、むし
 ろ平易なる説明を與へて、其の眞意義を了得せしめんことに力
 を用ひたる一。
 又品詞篇と文章篇とは由來孤立し易きが常なり。本書はこの
 缺を補はんが爲、兩篇の呼應に意を注ぎたる一。
 右の二點、聊か新工夫を試みたりと信ずと雖も、果して、その企望
 に副へりや否や、一に實地教授者の使用に俟ちて、之を見ざるべ
 からず。伏して大方の叱正を乞ふ。

大正五年十月

編者 しるす

新體女子文法上卷

目次

上篇 語の品別 (甲).....一

第一章 品詞の職分.....三

第一節 名詞.....四

第二節 代名詞.....八

第三節 動詞.....一三

第四節 形容詞.....一五

第五節 副詞.....二二

第六節 接續詞.....二六

第七節 感動詞.....二六

目次

一

第八節	助詞	三
第九節	助動詞	三
第十節	九品詞	六
第二章	品詞の形態(上)	六
第十一節	活用する品詞(一)	三
第一	動詞の活用	三
第二	動詞の活用形	五
第三	口語動詞の活用及び活用形	六
第四	形容詞の活用及び活用形	六
第五	動詞の自他	七
第六	叙述の自他	八

新體女子文法上卷 目次終



新體女子文法 上卷

文學士 春日 政治 編

上篇 語の品別(甲)

一 語及び單語

(口)は口語
文の符號な
り。文語文
には符號を
附せず。

(一) ことばに おのづから はふそく あり。

(二) わたくしは ことしから ぶんばふを
ならひ ます。(口)

右の文(一)のことばに、おのづからはふそく及びありは各

上篇 語の品別

或意味・職分を有して語なり。(二)のわたくしはことし。か
らぶんばふをならひ及びますも亦同じ。而もこれらの
語は或意味・職分を持ち得る最小單位なれば、ことに單語
といふ。

二 品詞

單語は其の職分と形態との上より別ちて、若干の群とし、
其の一つ々の群を品詞といふ。國語にては通常左の
九つの品詞を立つ。

- 名詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞
- 接續詞 感動詞 助詞 助動詞

練習 左の文を單語に分て。

- 一 春は一年のうちの最も好き時節なり。
- 二 もう櫻の花がさかりです。(口)
- 三 上野の森に運動會あり、隅田の流に競漕會あるべし。
- 四 搖籃を揺かす母の手は、亦よく天下を動かす。
- 五 けふできる事をあすまで延すな。(口)

第一章 品詞の職分

三 品詞の職分

- (一) 春風がそよく吹く。(口)
- (二) 散る花庭の面に白し。

右の文の春風・花・庭及び面は「なに」といふ物の名をあらはし、吹くと散るとは「どうする」といふ動作をあらはし、白しは「どんなだ」といふ有様を、そよ／＼は「どんなに」といふ有様をあらはし、がの及びには上下の語の關係をあらはせり。かく語はその有する意味によりて、それ／＼その職分を異にす。品詞の別ちは主として其の職分の異なりによる。

第一節 名詞

四

事物の名をあらはす品詞

- (一) 清少納言も紫式部も昔の才女である。(口)

- (二) 日本は獨逸の租借地たる青島を陥れ、領地たる南洋諸島を占領せり。

- (三) 勇める駒を櫻に繋げり。

- (四) 容は梅の如く、操は松の如し。

- (五) あの花は右が白で、左が赤だ。(口)

右の文の中の傍線を施したる語は皆事物の名をあらはせり。

事物の名をあらはす品詞を名詞といふ。

名詞はすべて「なに」といふ問に應ずる語なり。

五

數をあらはす名詞

- (一) 一つに二つを加へて三つなり。

(二) 其の五つめが實は第四の品です。(ロ)
 右の文(一)の一つ、二つ及び三つは事物の數量をあらはし、
 (二)の五つめと第四とは順序をあらはせり。
 事物の數量をあらはす語は「いくら」といふ間に應じるものなれど
 をあらはす語は「いくつめ」といふ間に應じるものなれど
 も、なほ廣く見れば、共に「なに」といふ間に應じるものなれ
 ば、亦名詞の一種とし、特に**表數名詞**といふ。
 表數名詞はその數ふる事物によりて、上下に種々の語を
 もつものあり。
 數量をあらはすもの
 マッチ一はこ、提灯三はり、鴨二つかひ、筆四本、

紙五帖、金六錢、手巾七ダース。
 順序をあらはすもの

八つめ、九軒目、第十、第十一卷、十二番、十三等、
十四號、十五級、第十六號、大正四年十一月十日。

練習 左の文の名詞を指摘し、ことに表數名詞を別て。

- 一 春夏秋冬を四時といふ。
- 二 校友會雜誌の第二號を出せり。
- 三 上野公園の山王臺には、彰義隊の墓や、西郷隆盛の銅像がある。(ロ)
- 四 一を聞き十を知る。
- 五 健康は第一の寶である。(ロ)

- 六 吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限りは櫻なりけり。
- 七 ビールやマツチは、盛に清國や南洋に輸出される。(口)
- 八 東郷大將のバルチック艦隊を打破りたるは、明治三十七八年戦役のことなり。

第二節 代名詞

六 事物の名の代りに用ふる品詞

- (一) 我、汝の事を彼に告げん。
- (二) これはそれより大きい。(口)
- (三) その物をあなたへ運べ。

右の文(一)の我、汝及び彼は人の名の代りに、(二)のこれとそ

目録
名詞代名詞を引く
め下体と云ふ

七

れとは事物の名の代りに、(三)のそこは場處の名の代りに、
あなたは方向の名の代りに用ひらる。
事物の名の代りに用ふる品詞を代名詞といふ。
代名詞は「だれ」「どれ」「どこ」「どちら」などいふ間に應ずる語
にして、皆「なに」といふ間に應ずる名詞の代用なり。
わが國、おのが姿、たが爲、この人、その物、かの
山、あの川、
等のわ、お、の、た、こ、そ、か、及、び、あ、は、わ、れ、お、の、れ、た、れ、こ、れ、そ、れ
かれ、あれに同じにて代名詞なり。
實體の觀念をあらはす品詞
名詞・代名詞は引きくるめて見れば、皆「なに」といふ間に應

ずる語にして、廣く實體の觀念をあらはすものなり。されば合せて、**體言**といふ。

ハ 文の題目となる品詞

- (一) 花 咲く。
- (二) 水 清し。

右の例(一)は花を題目とし、それにつきて咲くと述べ、(二)は水を題目とし、それにつきて清しと述べたるなり。

或事物を題目とし、それにつきて敘述をなす語の結合を文といふ。

- (三) 花 鳥を 招く。
- (四) 雪 花に 似る。

(五) 私が 鶏に 餌を 與へる。(口)

(六) 心 水に 同じ。

(七) 月日は 水より 速い。(口)

等も皆文なり。而してこれらの敘述にはいろくゝの形あれども、いづれも「なにかにつきて述べざるべからざれば、其の題目となる語は皆名詞若しくは代名詞、即ち體言なり。

體言は文の**題目**となる**品詞**なり。

練習 左の文より代名詞を抜き出せ。

- 一 わが村はかの山のこなたに在り。

- 二 お前はあちらへ行つて遊べ。(口)
- 三 わらはもかねて君の御芳名をば承り居り候。
- 四 この本はわたくしの、その筆はあなたのです。(口)
- 五 これ誰の過ぞや。
- 六 こちは知らぬが、そちは知れるか。

左の文より體言を抜き出せ。

- 七 そのもとはかの折、何をなされしか、それがし今以てその意を得ず。
- 八 病は口より入り、禍は口より出づ。
- 九 小積りて大となる、千里の道も一步より起り、萬仞の山も一簣に始まるが如し。

第三節 動詞

九 事物の動作をあらはす品詞

- (一) 字を書き、本を読む。
 - (二) うれしき事を喜び、かなしき事を憂ふ。
 - (三) 鳥が鳴き、花が落ち、水が流れる。(口)
- 右の文(一)の書きと讀むとは人の動作、(二)の喜びと憂ふとは人の心の動作、(三)の鳴き、落ち及び流れるは自然物の動作をあらはせり。

一〇 石段の上から廣小路を見おろすと、唯一面の人で、それがうようよとだん／＼こちらへ近よつて来る。(口)

事物の動作をあらはす品詞を動詞といふ。

動詞はすべて「どうする」といふ問に應ずる語なり。

(四) 昔、春日局といふ人あり。

(五) 机の上に書物がある。(口)

右の文のありとあるとは事物の存在をあらはす語なれども、廣き意味にて存在をも動作と見て、亦動詞とす。

練習 左の文より動詞を抜き出せ。

- 一 蠶は絲を吐き、蜂は蜜を醸す。
- 二 月落ち、鳥啼き、霜天に滿つ。
- 三 岩石が面白く並び、木立が小暗く繁る。(口)

二 事物の有様をあらはす品詞

第四節 形容詞

四 學を修め、業を習ひ、以て智能を啓發し、徳器を成就す。

五 死にたる親を思ひ、去りたる師を慕ふ。

六 雨が降る前には、必ずこの山に雲がかゝる。(口)

七 男は外に狩り、女は家に紡ぐ。

八 心こゝにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へども

その味を知らず。

(一) 雪は白く、墨は黒し。……… 叙述

(二) 山は高く、海は深い。(口)

- (三) 長き^カ竿を以て高き^{タカ}枝の^エ果物を^ツ落す。修飾
 (四) 正しい^タ行をして、美しい^{ウツク}一生を送れ。

右の文の白く・黒し・高く・深い・長き・高き・正しい及び美しいは皆事物の有様をあらはす語なり。

事物の有様をあらはす品詞を**形容詞**といふ。

形容詞はすべて「どんな」若しくは「どんなだ」といふ間に應ずる語なり。即ち事物の下につきて、その有様を述ぶる時は「どんなだ」となり、事物の上につきて、その事物を飾る時は「どんな」となる。(一)(二)は「どんなだ」の例にして、(三)(四)は「どんな」の例なり。

二 實體の用をあらはす品詞

動詞のあらはす動作及び形容詞のあらはす有様は、實體より起り、若しくは實體に屬するものにして、これを體の用といふ。故に名詞・代名詞を合せて體言といふに對して、動詞・形容詞を合せて**用言**といふ。

三 文の敘述をなす品詞

- (一) 花 咲く。
 (二) 水 清し。

右の二例は、共に或事物を題目として、其の敘述をなせるものにて、かゝるものを文といふことは、已に上に説きおけり。其の題目となる品詞の、體言なることも已に知る所なれども、こゝにはその敘述をなす品詞の如何を見ん

とす。

(一)の文は

何が どうする。

といふ形にて、敘述をなす語は動詞、

(二)の文は

何が どんなだ。

といふ形にて、敘述をなす語は形容詞なり。

文はいかに複雑となりても、多くは此の二つの形に入るものにて、

(三) 花 鳥を 招く。

(四) 雪 花に 似る。

(五) 私が 鶏に 餌を 與へる。(口)

(六) 心 水に 同じ。

(七) 月日は 水より 速い。(口)

等は單複の度こそ異なれ、(三)(四)及び(五)は

何が どうする。

といふ形に入り、(六)と(七)とは

何が どんなだ。

といふ形に入る。されば文は、其の敘述に於て、多くは動詞若しくは形容詞、即ち用言を要す。

用言は文の敘述をなす品詞なり。

練習 左の文より形容詞を抜き出し、其の「どんな」の義か「どんなだ」の義かを區別せよ。

- 一 父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。
 - 二 良い薬は苦い。(口)
 - 三 山けはしく、水清く、松青く、砂白し。
 - 四 その赤い着物は古いが、この白い帯は新しい。(口)
 - 五 いぶせき伏屋に、細き烟をたてゐたり。
- 左の文より用言を抜き出し、ことに敘述となれる語を別て。
- 六 三日月は高く、鋭く、光を放つ。
 - 七 流るゝ小川の水いと清し。

八年の少くて才の優れた女がある。(口)

第五節 副詞

用の有様をあらはす品詞

- (一) 汽車速かに走る。
- (二) 富士山がはつきり見える。(口)
- (三) 室や、狭し。
- (四) 山路は大層寂しい。(口)

右の文(一)の速かにと(二)のはつきりとは走る見えるといふ動作の有様をあらはし、(三)のやと(四)の大層とは狭し、寂しいといふ有様の有様すなはち程度をあらはせり。

用言有様ヨ言ニ支
スモトテ副詞ト云フ
又用言ヲ修飾スル
モトト云フモトモヨシ
副詞ハ初同形終同形
ハツツニ甘ク修飾シ

事物の用(動作若しくは有様の有様をあらはす品詞を副詞といふ。

副詞は事物の用の有様をあらはす語なれば、用言(動詞若しくは形容詞)に副はる。されど副詞のあらはす有様に、更に他の副詞を以て有様附くることあり。

副詞上の副詞がツキ
其の意味がイハズ

- (五) 汽車甚だ速かに走る。
- (六) 富士山が極はつきり見える。(口)

右の文(五)の甚だは副詞速かにの有様(程度)をあらはし、(六)の極は副詞はつきりの有様(程度)を附くる副詞なり。故に副詞は他の副詞にもそはる。副詞は多く「どんなに」といふ問に應ずる語なり。

形容詞が用言の有様をあらはす
副詞は其の意味をあらはす

形容詞は「どんなだ」若しくは「どんな」といふ義、副詞は「どんなに」といふ義なれば、其の意味甚だ相近くして、時に形容詞の副詞となることあり。

- (七) 聳ゆる山高し。
- (八) 高き山聳ゆ。
- (九) 山高く聳ゆ。

右の文(七)の高しは「どんなだ」、(八)の高きは「どんな」といふ義にて、共に形容詞なれども、(九)の高くは「どんなに」といふ義にかはりて副詞となれるなり。かくの如く、多くの形容詞は副詞となることを得。

二

文の修飾となる品詞

(一) 美しき花 咲く。

(二) 浅き水 清し。

右の文の美しきと浅きとは形容詞にて「どんな」といふ有様を附けて、花・水の體言を飾れり。

(三) 花 さかりに咲く。

(四) 水 いと清し。

右の文のさかりにといとは副詞にて「どんなに」といふ有様を附けて、咲く・清しの用言を飾れり。

形容詞と副詞とは文の修飾となる品詞なり。そのうち形容詞は體言の修飾となり、副詞は用言の修飾となる。

(五) 美しき花 愛らしき鳥を しきりに招く。

(六) 雪 白き花に さながら似たり。

(七) 私が 黒い鶏に 餌を しばく 與へる。(口)

等の例につきても之を見るべし。

練習 左の文より副詞をぬき出せ。

一 清風徐ろに來りて、波高く起らず。

二 彼は仕事を最もまじめに勉める。(口)

三 しばし待て、決して汝に迷惑をかけざるべし。

四 よくく聞いて忘れるな。(口)

五 態々御出で下され候ひしに、生憎不在いたし、甚だ遺憾に存じ候。

左の文の形容詞と副詞とを別て。

- 六 烈しき暑さなりしかば草木いたく枯れたり。
- 七 うれしい知せをうれしく聞いて、大層うれしい。(口)
- 八 大いに勉めざれば成ること少し。
- 九 鶯も未だ鳴かず、花の咲くも未だし。

第六節 接續詞

五 語句文章をつなぎ合する品詞

- (一) 月及び花を愛づ。
- (二) 五月の空、晴れ又曇る。
- (三) 毛筆或は鉛筆を持參すべし。
- (四) 山を越え、かつ海をわたる。

- (五) 春は來れり。されども、花未だ開かず。

右の例の及び又或はかつ及びされどもは上下の語句文章をつなぎ合する用をなせり。

語句文章をつなぎ合する品詞を接續詞といふ。

接續詞は、多く口語の「と」「か」「から」若しくは「けれども」といふ意に當る語なり。但し、

- (六) 馬と犬とあり。
- (七) 舟で行くか、車で行かう。(口)
- (八) 風が吹くから波が立つ。(口)
- (九) 春來れども花咲かず。

のと「か」「から」どもは語句文章をつなぎ合すること勿論な

れども、これ等は便宜上助詞として取扱ふ。

練習 左の文より接續詞をぬき出せ。

- 一 英佛露及び獨の四箇國。
 - 二 花若しくは月あるべし。
 - 三 秋立ちたり、故に風涼し。
 - 四 何人にも入場を許す、但し六歳以下のものは此の限りにあらず。
- 讀本の既習の部分につきて、接續詞を求めよ。

第七節 感動詞

六 感動に發する品詞

- (一) あな、うれし。
- (二) ああ、草臥れた。(口)
- (三) あはれ、かの君は逝きしか。
- (四) ええ、憎い奴。(口)

右の例のあな、ああ、あはれ及びええは、感動したる時、思はず發する聲音なり。

感動せる時發する品詞を感動詞といふ。

- (五) うれしきかな。
- (六) 美しき光かも。
- (七) 早く目がさめたんですよ。(口)

わいはいと
詔すが正しか
るべけれど、
今姑く世の慣
用に從ふ。

おやおはあ

(八) それはちがひますわい。(口)
のかなかもよ及びわいなどは、感動をあらはすこと勿論
なれども、これらは便宜上助詞として取扱ふ。

練習 左の文に感動詞を入れよ。

- 一 ○○うれしよろこばし。 *あらまあ お、あ、あわれ*
 - 二 ○○○今年の秋もいぬめり。 *え、おや*
 - 三 ○○○お珍しいこと。(口)
 - 四 ○○○出發せん。
 - 五 ○○○さうですか。(口)
- 諸子の知れる感動詞を示せ。

二七

第八節 助詞

語と語との關係をあらはす品詞

- (一) 馬は人を乗せて遠く走る。
- (二) 東京から京都まで参ります。(口)
- (三) 再びかへり見しが、もはやあらざりき。
- (四) 行けば行かれる。(口)

右の例のはをてからまでが及びはは、語の下につきて、そ
の語と他の語との關係をあらはす語なり。
語の下につきて、その語と他の語との關係をあらはす品
詞を助詞といふ。

場所
に他在
一方向
を使役
味をこ
つら
つら

助詞
他、詞中、若くは下三句、
或は單獨ニテ、
モ、

- てはとす
- (五) さる事實ありや。
 - (六) あなたは何をして入らつしやるか。(口)
 - (七) うれしきかな。
 - (八) 早く目がさめたんですよ。(口)
- 等のや・か・かな及びよの如く助詞には、又語の下につき、その語を助けて種々の意味をあらはすものあり。

練習 左の文より助詞を抜き出せ。

- 一 花の顔月の眉。
- 二 月にむら雲花に嵐。
- 三 梅と櫻を両手にもつ。(口)

- 四 瓜の蔓に茄子はならぬぞ。(口)
 - 五 今より幾日にて達するか。
 - 六 雨がひどく降るに、風までが烈しく吹く。(口)
 - 七 よく勉強したが、からだは弱かつたから、合格しなかつた。(口)
- 左の文に助詞を補へ。

- 八 これ〇何〇讀む〇。
- 九 話〇聞い〇涙〇こぼれた。(口)
- 一〇 氣候〇寒けれ〇〇健康〇〇害なし〇いふ。

第九節 助動詞

助詞を助けて種々の意味を附くる品詞

助動詞とは動詞のトレツキ
其の意味の足る所を助ける
同じく、助動詞は意味を附くる品詞
其の意味の足る所を助ける

- (一) 書を讀まず。
- (二) 朝早く起くべし。
- (三) 十一月三日に、立太子の禮があつた。(口)
- (四) 私も見に行かう。(口)

右の例のずべし、た及び引は動詞の下につきて、其の動作にいろくゝの意味を附くる語なり。

動詞の下につきて、其の動作に種々の意味を附くる品詞を助動詞といふ。

元

獨立して意味をもたぬ品詞

助詞と助動詞とは、獨立してはその意味をなさず、他の語に附きて其の語の助けをなすにすぎず。この點、他の品

助詞はシヨ
シ、助辭は
シヨと訓
むべし。

詞と頗る趣をことにすれば、特に名づけて助辭といふ。

練習 左の文より助動詞を抜き出せ。

- 一 いざ見にゆかん。
- 二 使を遣はして急を都に告げしむ。
- 三 昔女住みけり。
- 四 君は未だ遠くは行かじ。
- 五 今年もすでに半ばは過ぎぬ。
- 六 子供に花をとりにゆかせる。(口)
- 七 なれし東の花やちるらん。
- 八 残暑もまだ退くまい。(口)

- 九 六尺の塀も飛び越えられる。(口)
- 一〇 人の心もかくてありたし。
- 一一 かゝる人を見ざるなり。
- 一二 お菓子がたべたい。(口)

第十節 九品詞

三 九品詞

品詞は以上學びたる名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感動詞・助詞及び助動詞の九つにて、各其の職分を異にせり。

その中、特に名詞・代名詞をば體言といひ、動詞・形容詞をば

用言といひ、助詞・助動詞をば助辭といふ。而して體言は文の題目となり、用言はこれが敘述をなし、形容詞・副詞は修飾をなす品詞なり。

練習 左の文を品詞に分別せよ。

- 一 鶏はときをつくる。
- 二 衣服はよく風を通し、日に當て汚れたるをば洗ふべし。
- 三 心に望起らば、困窮したる時をおもひ出すべし。
- 四 すいた事には身をやつす。(口)
- 五 すつかり忘れて居たことがあつた。(口)
- 六 ああ正成よ、正成よ。

- 七 器具は多く木や金で造られ又土や石からも造られる。(口)
- 八 朝顔のさくや親にも叱られず。

第二章 品詞の形態(上)

三 形の變化する語と變化せざる語

彼の乗りたる馬は甚だ疾し。

右の文の動詞乗るは

- 乗らず。
- 乗りたり。
- 乗る。
- 乗れども。

の如くかはり、助動詞たりは

- 乗りたらん。
- 乗りたり。
- 乗りたる馬。
- 乗りたれども。

の如くかはり、形容詞疾しは

- 疾く走る。
- 疾し。
- 疾き馬。
- 疾けれども。
- の如くかはる。しかるに、

形の變化も此の同
名詞 八名詞
副詞 接詞
感動詞 此の同
動詞 形 此の同
助詞 此の同

彼、の、馬、は、甚だ。

等は、如何なる場合にも、其の形をかふることなし。

品詞は、其の場合によりて、形の變化するものと、變化せざるものとあり。其の變化をば活用といふ。

活用する語には動詞・形容詞及び助動詞あり、活用せざる語には名詞・代名詞・副詞・接續詞・感動詞及び助詞あり。

三 活用語の變化せざる部分と變化する部分

乗 ^の れ	乗 ^る 疾 ^け れ	乗 ^り 疾 ^し	乗 ^ら 疾 ^く
	た ^れ	た ^る	た ^り

右の例に於て、語の上部乗^の疾^け及びた^ははかはらずして、其の下部のみ種々にかはる如く、活用語の多くは、變化せざる部分と、變化する部分とを有す。其の變化せざる部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といふ。乗^の疾^け及びた^はは語幹にて、ら^りる^れ、く^しき^{けれ}及びら^りる^れは語尾なり。

練習

左の文の品詞を、活用する語と、活用せざる語とに別ち、ことに活用する語は其の語幹と語尾とを別て。

- 一 運動すれば食慾進む。
- 二 遠き親類より近き他人。
- 三 父母は我を生み、我を養ひ、我を長せしめ、我を教へたり。
- 四 少年老い易く、學成り難し。

五 弟は已に學校にゆきしが、妹は未だ家を出でず。

第十一節 活用する品詞(一)

第一 動詞の活用

三 動詞の活用の種類

死な^ず。 書か^ず。 消え^ず。
 死に^{たり}。 書き^{たり}。 消え^{たり}。
 死ぬ[。] 書く[。] 消ゆ[。]
 死ぬ^(る)人。 書く^(る)文字。 消ゆ^(る)雪。
 死ぬ^(れ)ども。 書く^(れ)ども。 消ゆ^(れ)ども。
 死ぬ[。] 書く[。] 消え[。]

こゝに(一)を施したるは五十音圖の行にかゝはらず、そはる音なり。

動詞の活用用字表

マ	カ	サ	カ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行
書	書	書	書	書	書	書	書	書	書
消	消	消	消	消	消	消	消	消	消
死	死	死	死	死	死	死	死	死	死
拭	拭	拭	拭	拭	拭	拭	拭	拭	拭

二 四段活用

右の例に於ける如く、動詞の活用は必ず五十音圖の同行内に於てす。されど、其の形式は一様ならず。今分類してその種類を見んとす。

書か^ず。 書^きたり。
 書く[。] 拭^ひたり。
 書く[。] 拭^ふども。
 書く[。] 拭^へども。
 書く[。] 拭^ふ。

右の例の書くは力行に活用し、拭ふは八行に活用すれども、共にアイウエの四列に於てすることは相同じ。五十音圖のアイウエの四列にわたりて活用するものを

正格四段活用
変格活用

正格
四段活用
変格
ナ行

四段活用といふ。

咲 $\begin{matrix} \text{か} \\ \text{き} \\ \text{く} \\ \text{け} \end{matrix}$
 泳 $\begin{matrix} \text{が} \\ \text{ぎ} \\ \text{ぐ} \\ \text{げ} \end{matrix}$
 推 $\begin{matrix} \text{き} \\ \text{し} \\ \text{す} \\ \text{せ} \end{matrix}$
 勝 $\begin{matrix} \text{た} \\ \text{ち} \\ \text{つ} \\ \text{て} \end{matrix}$
 拂 $\begin{matrix} \text{は} \\ \text{ひ} \\ \text{ふ} \\ \text{へ} \end{matrix}$
 學 $\begin{matrix} \text{ば} \\ \text{び} \\ \text{ぶ} \\ \text{べ} \end{matrix}$
 勵 $\begin{matrix} \text{ま} \\ \text{み} \\ \text{む} \\ \text{め} \end{matrix}$
 悟 $\begin{matrix} \text{ら} \\ \text{り} \\ \text{る} \\ \text{れ} \end{matrix}$

等は皆四段活用なり。

ナ行變格活用

死なす。
 死にたり。
 死ぬ。
 死ぬる人。

死ぬは現今、死ぬる・死ぬれといふ形を廢して、四段活用とするこゝあり。
(文許、一)

死 $\begin{matrix} \text{ア} \\ \text{イ} \\ \text{ウ} \\ \text{エ} \\ \text{オ} \end{matrix}$
 なにぬ(の)
 るれ

例(ば)カ行四段活用の物同はナ行ナは希ナリ
 死なす・死にたり・死ぬる等は皆四段活用なり
 死ぬる人(の)はナ行ナは希ナリ
 死ぬる(の)はナ行ナは希ナリ

正格四段活用
変格

死ぬを死すに混すべからず死すは後に述ぶる他の活用なり。

死ぬれども。

死ぬといふ語は、ナ行の ア・イ・ウ・エ 四列にわたりて變化すること、四段活用に同じけれども、更に其のウ列音ぬに、

れのそはりたる形を有す。これをナ行變格活用といふ。これと同類に往ぬといふ語あり。

ラ行變格活用

有らす。
 有りき。
 有り。
 有るなり。

有 $\begin{matrix} \text{ア} \\ \text{イ} \\ \text{ウ} \\ \text{エ} \\ \text{オ} \end{matrix}$
 らりる(る)

ナ行變格活用の物同は死ぬる
 ナ行變格活用の物同は死ぬる
 ナ行變格活用の物同は死ぬる
 ナ行變格活用の物同は死ぬる

格活用上二段
格活用上二段
格活用上二段

格活用上二段
格活用上二段
格活用上二段

三

欲す、なみす、罪す、要す、達す、存ず、
論ず、困ず、勉強す、議論す、入學す。

動詞の九活用

動詞の活用にはすべて九種あり。四段・ナ行變格・ラ行變格上二段・下二段・上一段・下一段カ行變格及びサ行變格これなり。

動詞の活用を識別するには、その語に打消の助動詞ずを附せよ。其の語尾のア列音となるものは四段活用(ナ行變格)ラ行變格を除くイ列音となるものは上二段活用、エ列音となるものは下二段活用、イ列の一音を殘すものは上一段活用なり。數少き下一段活用及び諸變格は之を

顧みるはかへり
と見ると、
率ゐるはひき
とぬると結び
つきて成り、
共に上一段活用なり。

諸記するに難からず。

病ま^アず四段 歸ら^アず四段

恥ぢ^イず上二段 覺め^エず下二段

干^イず上一段 見^イず上一段

練習 左の文の動詞を指摘し、其の活用をいへ。

- 一 敵の司令官は白旗を掲げて降り。
- 二 立つ鳥跡を濁さず。
- 三 今日くる友を迎へんと、急ぎて停車場に車を走せたる人あり。
- 四 楽しみは珍しきふみ人にかりて、はじめ一ひらひろげたるとき。
- 五 年少き中に習慣となることは、終身永續して變せず。

さす形となり、又この形にていひ据うる時は體言となる。
親は起き、兒はいねたり。
往きは早く、歸りは遅し。

終止形

人行く。 虫死ぬ。 女あり。

兒起く。 妹、賞を受く。 友、裕を著る。

弟、球を蹴る。 客來。 車の音す。

ラ行變格活用の連用形と終止形とは同じ。

右の例の如く、下につゞけず、言ひきるに用ふる活用形を終止形といふ。

連體形

行く人。 死ぬる虫。 家にある女。

四段活用、上下一段活用の終止形と連體形とは同じ

元

已然形

起くる兒。 賞を受くる妹。 裕を著る友。
球を蹴る弟。 來る客。 音する車。
右の例の如く、下の體言にいひつゞくるに用ふる活用形を連體形といふ。
連體形はその下の體言を省きて、そのまゝ、體言代用をなすことあり。
起くるを見て、寝ぬるをやむ。

人行けば。 虫死ぬれば。 女あれば。
兒起くれば。 賞を受くれば。 裕を著れば。
球を蹴れば。 客來れば。 車の音すれば。

已然形の意味を未然形の如く取るば、口語より来る誤なり。

四〇

命令形は四段活用・ラ行變格活用に於ては、已然形と同じく、他はナ行變格活用の餘きて皆未然形に同じ。但し四段活用・ナ行變格活用の外は助詞よを伴ふものとす。

右の如く、下に助詞ばを附して、動作の起りたるを確定するに用ふる活用形を**已然形**といふ。
已然形は又ど若しくはどもを附して、動作を確定することをあらはす。

客あれども、主人なし。

命令形

汝行け。

安らかに死ね。

さきくあれ。

早く起きよ。

賞を受けよ。

裕を著よ。

球を蹴よ。

また來よ。

復習をせよ。

右の例の如く、動作せんことを命令するに用ふる活用形を**命令形**といふ。

動詞活用表

活用種類	語幹	語尾					
		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	
四段	縫	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ナ行變格	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行變格	有	ら	り	り	る	れ	れ
上一段	落	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
下二段	消	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ
上一段	見	み	み	みる	みる	みれ	みよ
下一段	蹴	け	け	ける	ける	けれ	けよ
カ行變格	來	こ	き	く	くる	くれ	こよ
サ行變格	爲	せ	し	す	する	すれ	せよ

練習 左の文の動詞を指摘し其の活用を検し更に六つの活用形を作れ。

一 繪葉書は獨逸より流行し初めしものと聞く。

二 良人に事へ、子をはぐくみ、炊ぎと濯ぎとに日を暮しぬ。

三 茸なども生ひ出でん、栗もはや落つべし。

左の文の動詞を抜き出し其の活用形をいへ。

四 雲を凌ぎて攀ち登れば、高嶺のおろしいたづらに吹く。

五 小切手は通貨にて支拂をなす手数を省かんが爲、發行するものなり。

六 徳、幽蘭のかをりに似すや。

七 人を見て、法を説け。

第三 口語動詞の活用及び活用形

四

口語死ぬば文語の死ぬる。死ぬれさいふ形を失ひ、文語有りば口語にて有るさいひ切る。

四段活用

縫はう。 死なう。 有らう。

縫ひます。 死にます。 有ります。

縫ふ。 死ぬ。 有る*。

縫へば。 死ねば。 有れば。

右の例の如く、文語の四段活用・ナ行變格活用・ラ行變格活用は、口語にて共に四段活用なり。

上一段活用

著ない。 起きない。

口語起きるは文語の起く。

三

起くる・起く
れさいふ形を
失ひて起き
る・起されど
なる。

三

口語受けるは
文語の受く・
受くる・受く
れさいふ形を
失ひて受け
る・受けられ
なる。
文語の上・下
二段活用より
来る口語の上
下一段活用は
語幹語尾の別
を有せり。

四

著る。 起きる。
著れば。 起されば。

右の例の如く、文語の上二段活用・上一段活用は、口語にて
共に上一段活用なり。

下一段活用

蹴ない。 受けない。
蹴る。 受ける。
蹴れば。 受ければ。

右の例の如く、文語の下二段活用・下一段活用は、口語にて
共に下一段活用なり。

力行變格活用

口語来るは、
文語の來さい
ふ形を失ひた
れども、尙他
に之に類する
語なし。

來ない。
來ます。
來る。
來れば。

文語の力行變格活用は口語にても力行變格活用なり

サ行變格活用

しない。
する。
すれば。

文語のサ行變格活用は口語にてもサ行變格活用なり。
口語動詞の活用は四段・上一段・下一段・力行變格・サ行變格

口語するは、
文語のせ・す
さいふ形を失
ひたれども、
尙他に之に類
する語なし。
せさいふ形を
残せる地方あ
れど、こゝに
は東京語に従
ひて省けり。

五

の五つなり。今之を文語と對照して示せば左の如し。

文語	四段活用	ナ行變格活用	ラ行變格活用	上二段活用	上二段活用	下二段活用	下二段活用	カ行變格活用	サ行變格活用
	四段活用	四段活用	四段活用	上一段活用	上一段活用	下一段活用	下一段活用	カ行變格活用	サ行變格活用
口語									

四

口語動詞の活用形
口語動詞の活用以上の如くなれば其の活用形も亦之に

口語動詞はいづれの活用も終止形と連體形と同一ければ、之を別つ要なければ姑らく文語に準じて之を別ちたり。

準ぜり。

口語動詞活用表

活用種類	四段								語尾 (活用形)						
	縫	死	有	落	(見)	消	(蹴)	(來)	(爲)	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
上二段	は	な	ら	ち	み	え	け	こ	し	は	ひ	ぬ	ふ	へ	へ
上二段															
上一段															
下二段															
下二段															
カ行變格															
サ行變格															

文語の已然形に當る形に、助詞はを附すれば、

あなたが縫へば、わたしが裁ちませう。

栗が落ちれば拾はう。

の縫へば、落ちればの如く、動作の未だ起らざる前に、假定する意をあらはす故に**假定法**と名づく。未然形にはを附したる縫はば、落ちばといふ形は、口語にて普通用ひられざれども、

まだ、袖を縫はない。

すぐ袖を縫はう。

今、栗は落ちない。

二三日後には栗も落ちよう。

の如く、打消・未來等はなほ未然形にてつくる。

練習 左の文の動詞を指摘し、其の活用及び活用形を

いへ。

- 一 鶏が鳴けば、夜が明けよう。(口)
- 二 雪が降り、氷の張る冬が来る。(口)
- 三 しようとは決心すれば、きつとし遂げる。(口)
- 四 今日あなたが迎へるうれしさが、胸一ぱいに溢れます。(口)
- 五 起きろと起す人となれ、起される人になるな。(口)

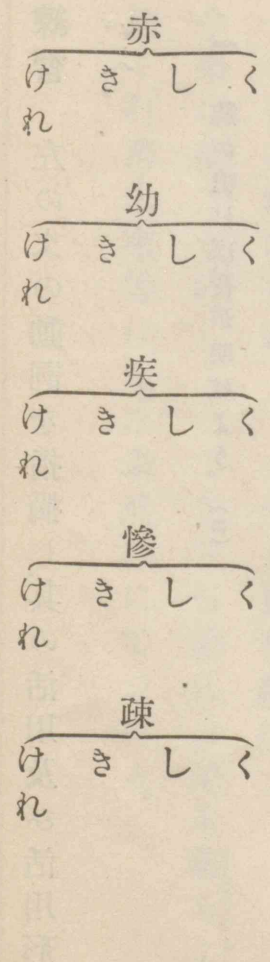
第四 形容詞の活用及び活用形

四七 形容詞の活用

清くすむ。 水清し。 清き水。 清けれども。

つらく思ふ。 心つらし。 つらき事。 つらければ。

右の例の清しもつらしも共にくしきけれと活用す。 形容詞の活用は動詞の如く種類多からず皆一様にくしきけれなり。



美しい、同じのじは變化せざる語幹なり。されど漢字の下には必ず送りおくべし。

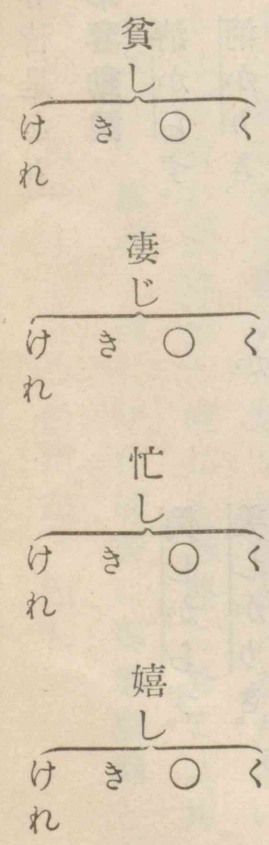
等皆是なり。されど、

美しく咲く。 同じく行く。

美しき花。 同じきこと。

美しけれども。 同じけれども。

の如く、語幹末にし若しくはじめをもつ語は、其のいひ切る形に、語尾しをつけざるものとす。



等皆是なり。

罨 形容動詞

清からず。

美しからず。

清かりき。

美しかりき。

清かるべし。

清くありか。

美しかるべし。

美しくありか。

清かれども。

美しかれども。

右の例の清かり、美しかりといふ語は、もと清く、美しくに各動詞ありのつゞきて約められ、ラ行變格活用となりたるものなり。形容詞はすべてこの形を取ることを得次に

愚かなり。

詳かなり。

當然なり。

などいふ一類の語あり。これらはもと愚かに、詳かに、當然にといふ副詞に、各ありのそはりて約められ、亦ラ行變格活用となりたるものなり。又

杳たり。

赫々たり。

爛漫たり。

などいふ一類の語あり。これらはもと杳と、赫々と、爛漫とといふ副詞に、各ありのそはりて約められ、同じくラ行變格活用となりたるものなり。

以上三類の語は、職分に於ては、皆「どんなだ」といふ有様をあらはす故に、形容詞と同じく、形態に於ては、共にラ行變格活用にて動詞と同じければ、特に**形容動詞**と名づけ、形容詞の一種とす。その活用左の如し。

咒

形容詞の活用形

清 か
 詳 かな
 赫々 た
 ら
 り
 る
 れ

未然形 行かば。 善くば。 悪しくば。
 連用形 行き著く。 善くあり。 悪しくあり。
 終止形 人行く。 行善し。 行悪し。
 連體形 行く人。 善き行。 悪しき行。
 已然形 行けば。 善ければ。 悪しければ。
 命令形 行け。

右の例の如く、動詞の活用形に形容詞を比べ見るに、形容

形容詞はそのまゝにはて命令をあらはさず、形容動詞となりてはじめてあらはすを得。

悪し・美しなどの終止形を現今、悪し・美しとなすことあり。(文許、二)

吾

形容動詞の活用形

形容動詞はラ行變格活用なれば活用形も亦動詞のラ行變格活用と全く相同じ。

語幹	善 ^よ	悪 ^あ し
語尾 (活用形)	未然形	く
	連用形	く
	終止形	よし
	連體形	き
	已然形	けれ
	命令形	—

詞にも未然連用終止連體已然の五活用形あれども、たゞ命令形を闕きたり。

形容動詞には元來りて、たりはつゞかれと異なりの一語は、現今四段活用動詞の如く、之をつゞくることあり。(文許、四)

五

口語形容詞の活用

語幹	語尾 (活用形)				
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
長か					
大いな	ら	り	り	る	れ
赫々た					
					れ

清くすむ。

美しく咲く。

清い。

美しい。

清い水。

美しい花。

清ければ。

美しければ。

右の例の清い、美しいは共にく、い、けれと活用す。かつ文語にて、いひ切る時、語尾を附けざる美しも、口語にては美しいと語尾を附ければ、清いの類と全く一様になれり。口語形容詞の活用左の如し

清くすむ。美しい。清い水。清ければ。美しく咲く。美しい花。美しければ。

五

口語形容詞の活用形

未然形 清くば。

連用形 清くすむ。清くすむ。

終止形 清し。清い。

連體形 清き水。清い水。

口語形容詞に於ては終止形と連體形と同じこと、及び文語の已然形の假定形となること、口語動詞に於けるが如し。

已然形 清ければ。 清ければ。(假定形)
右の如く、形容詞の文語・口語を比へ見るに、口語形容詞は未然形を失ひ、く・い・い・けれの四形となれり。

語幹	清	語尾 (活用形)			
		未然形	連用形	終止形	連體形
美し					
		く			
			い		
				い	
					けれ
					—
					命令形

連用形はうとなることあり。

お早うございます。

美しうございますこと。

練習 左の文の形容詞を指摘し、其の活用形を檢せよ。

- 一 朱に交れば赤くなり、麻の中の蓬扶けすして直し。
- 二 古いものは美しくはないが、品はよい。(口)
- 三 一方に便利なるもの、他方に弊害をなすこと少からず。
- 四 暑いも寒いも彼岸まで。(口)
- 五 貧しい家にわびしく暮すのは悲しい。(口)
- 六 君は酸からず甘からず、辛きはいかに唐辛。
- 七 慾深き人は其の心常に貧しく、慾なき人は其の心常に豊かなり。

第五 動詞の自他

三

自動詞と他動詞

- (一) 水 流る。
- (二) 栗 落つ。

右の例の流る落つといふ動作は、これを起す主なる水若しくは栗のひとりなしつゝあるものなれど、

- (三) 水 花を 流す。
- (四) 弟 栗を 落す。

の流す落すといふ動作は、これを起す主なる水若しくは弟の上のみ止まらで、花栗の如き他のものを處分す。動作の、それを起す主にのみ止まりて、他に關係なきものを自動といひ、それを起す主にのみ止まらで、他を處分す

四

るものを他動といふ。自動をあらはす動詞を自動詞といひ、他動をあらはす動詞を他動詞といふ。他動詞には必ず花を栗をの如く何をといふ語を要す。

自他の對

流るの自動詞に對して、流すの他動詞あり、落つの自動詞に對して、落すの他動詞あれども、すべての動詞皆しかるにはあらず。

- 鳥 死ぬ。
- 女 あり。
- 犬を 打つ。
- 衣を 着る。

の死ぬありは自動詞にて、之に對する他動詞なく、打つ着るは他動詞にて之に對する自動詞なし。

風 吹く。

風 花を 吹く。

小兒 笑ふ。

小兒 大人を 笑ふ。

門 閉づ。

小使 門を 閉づ。

右の例の上のは自動詞、下のは他動詞なれど、全く同一の語の場合によりていつれにもなり得るものなり。

民家 焼く。(カ行下二段) 兵火 民家を 焼く。(カ行四段)

軍隊 進む。(マ行四段) 我が軍 陣地を 進む。(マ行下二段)

子 育つ。(タ行四段) 母 子を 育つ。(タ行下二段)

右の例の上のは自動詞、下のは他動詞にて、一見同一の語

の如くなれども、其の活用の異なるに注意すべし。

戦 起る。 列國 戦を 起す。

湯 冷ゆ。 風 湯を 冷す。

日 出づ。 家 火を 出す。

食糧 盡く。 敵軍 食糧を 盡す。

風 揚る。 子供 風を 揚ぐ。

右の例も、上のは自動詞、下のは他動詞なれども、これらは語尾を見れば、直ちに活用の異なる語なるを知るべし。要するに、動詞には自他相對するものと、相對せざるものとあり、相對するものには、全く同一の語を兩用するものと、語頭の相似て、活用の異なるものとあり。

練習 左の文の動詞の自他を別ち、尙それに相對する語あらば述べよ。

- 一 水嵩増して舟覆らんとす。
- 二 視れども見えず、聽けども聞えず。
- 三 みだりに金錢を費すを止めよ。
- 四 春水四澤に満ち、夏雲奇峯峙つ。

左の文の動詞の自他に誤あらば正せ。

- 五 日は山を照りて紫雲を起る。
- 六 舟を彼の岸に着きて、人を下る。
- 七 衣を解けて足を延びたり。

第六 敘述の自他

要 自動詞にて敘述をなす文。

- (一) 花 咲く。
- (二) 鳥が 飛ぶ。(口)

右の文の敘述、咲く・飛ぶは自動詞にて、其の動作の及ぶ「何を」といふ目的を要せずして、意味完きことは已にいへり。

- (三) 雪 花に 似る。
- (四) ボアンカレーが 大統領と なる。(口)

の敘述、似る・なるは自動詞にて「何を」といふ目的を要せざること、咲く・飛ぶと同じけれども、其の動作の標準となる

弄

ものをいはずれば意味完からず。自動詞にて敘述をなす文は、目的を要せざれども、語によりては標準を要するものあり。

形容詞にて敘述をなす文。

- (五) 水が 清い。(口)
- (六) 山 遙かなり。

右の文の敘述清いは形容詞、遙かなりは形容動詞にて、他に目的をも標準をも要せずして、意味完きこと、咲く・飛ぶなどの自動詞に同じ。されど、

- (七) 心 水に 同じ
- (八) 月日は 水より 速い。(口)

毛

の同じ速いは水に水よりの如き標準をいはずれば、意味完からざること、似るなるなどの自動詞に同じ。形容詞にて敘述をなす文には目的を要せず、たゞ比較をなす時に標準を要す。

他動詞にて敘述をなす文。

- (九) 花 鳥を 招く。
- (二〇) 風が 花を 散す。(口)

右の文の招く・散すは他動詞にて、鳥を花をの如き目的をいはずれば、意味完からず。

- (二一) 妹 衣物を 弟に 著す。
- (二二) 私 が 鶏に 餌を 與へる。(口)

の著す與へるは他動詞にて衣物を餌をの如き目的を要
 すること勿論なれども更に弟に鶏の如き標準をい
 ざれば意味完からず。
 他動詞にて敘述をなす文は、すべて目的を要し、語により
 ては更に標準を要するものあり。

練習 左の文に要する標準若しくは目的を補へ。

- 一 天の星……稀なり。
- 二 我が家の猫……捕ふ。
- 三 先生が……授ける。(口)

新體女子文法 上卷 終

大正六年十一月十六日
 大正五年十二月十六日
 大正四年十二月十六日
 大正三年十二月十六日
 大正二年十二月十六日
 大正元年十二月十六日
 訂正再版發行
 訂正再版發行
 訂正再版發行
 訂正再版發行
 訂正再版發行
 訂正再版發行

新體女子文法	
上卷定價	金貳拾參錢
下卷定價	金貳拾參錢
大正十一年度臨時定價	金四拾四錢

大正六年十二月十七日
 高等女子學校國語科
 文部省檢定用



不許複製

著者 春日政治

東京市神田區表神保町二番地

鈴木常次郎

大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

鈴木常松

發行者

印刷者

發行所

東京市神田區表神保町二番地
 振替口座(東京二六四四番)
 大阪市東區博勞町五丁目
 振替口座(大阪四七一番)

修文館

外科三解

柳源

贈板
甲
丁
子